山口県立大学　学位論文　博士（健康福祉学）

博士論文審査要旨

授与番号

健康福祉第二号

取得者

大下　由美

論文題目

生成的ソーシャル・サポート・ネットワーク論
―理論、技法、測定法の体系化に向けて―

授与年月日

2009（平成21）年3月18日

審査委員

主査	小川　全夫	（山口県立大学大学院健康福祉学研究科　教授）
副査	樫原　朗	（山口県立大学大学院健康福祉学研究科　教授）
副査	高野　和良	（山口県立大学社会福祉学部　教授）
副査	加茂　陽	（県立広島大学保健福祉学部　教授）

論文要旨

生成的ソーシャル・サポート・ネットワーク論
―理論、技法、測定法の体系化に向けて―

本研究は、従来の人と社会との関係が健康に影響を及ぼすことを示すソーシャル・サポート・ネットワーク（以下 SSN とする）に関する実証的、臨床的研究における理論的、技術的問題点を整理した上で、SSN にサポート効果を実在化させるのではなく、SSN の構成員間の関係性を変容することで、相互にサポート効果を高めあう過程を生成する生成的ソーシャル・サポート・ネットワーク論を構築することを目的としている。

本論の枠組みは、基礎理論として、ベイトソンのエコロジカルなシステム理論を取り入れたことで、従来の実在的に捉えられてきたネットワークは、トランズアクショナルな過程から定義しなおされた。また、ウィトゲンシュタインの言語ゲームの概念を援用して概念化された CMM 理論を中心に変容論が論じられ、対人間のストレッサーを軽減するサポート効果は、トランズアクショナルな過程において、特定の現実構成の規則群（意味構成規則と行為選択規則）の変容により生成されることが論じられた。また、これら基礎理論、変容論と連動させて、従来の家族療法やソーシャルワークで用いられてきた循環的質問法や解決志向アプローチの諸技法を、サポート効果の生成技法として体系化した。そして、ベールズの相互作用過程分析法を発展させた社会構成主義的効果測定法に基づいて、本論での理論体系と結びつく、サポート効果の測定法が提示された。このような体系化された理論に基づき、既存の SSN のサポート効果を高めるための支援を行った過程の分析が、事例研究においてなされた。そこでは、既存のソーシャル・サポート・ネットワークにおいて展開している、問題生成の規則群と、解決生成の規則群を反転させる働きかけをすることで、SSN との間で生成されるサポート効果を向上させた過程が、サポート効果の測定法を用いて、明らかにされた。

本研究の成果は、事例研究を通して、生成的ソーシャル・サポート・ネットワーク論として体系化を試みた、基礎理論、介入技法、そして、効果測定法の有用性が示されたことである。つまり、基礎理論に基づく介入過程において、サポート効果を高めるために、既存の資源を掘り起こすことの有用性が述べられ、力動的な変化の過程の測定法を具体的に示したことである。

最後に、健康福祉の領域で、今後本研究で体系化が試みられた生成的ソーシャル・サポート・ネットワーク論を発展させていくためには、以下の研究を進めていく必要があると考える。一つは、本論に基づく実践研究を重ね、理論および技法の洗練化を図ることである。もうひとつは、効果測定法において、信頼性と妥当性の検証を行うことである。

Generative theory of a social support network:
Unifying theory, skills and measurement

This article aimed to construct a clinical theory of a social support network (SSN) from the view of social constructionism. For this purpose, the basic and clinical theories and the measurement method that are elements of the clinical SSN theory are reconstructed. The problem solving power of this theoretical system is then evaluated in a case study.

1. Based on the theory of an ecology of mind (Bateson, 1972), the basic theory is systematized. An

ecological system is defined as a structure that has subsystems with transactional processes that operate between these subsystems. Under this framework, fluctuations of the subsystems change the total ecological system; on the other hand, a subsystem is transformed by the total ecological system. 2. Coordinated management of meaning (CMM) (Cronen, 1985), which is strongly influenced by Bateson's theoretical contribution and the theoretical movement of social constructionism, is used as the clinical theory. CMM explains human communication based on two main concepts; the rules of meaning construction and act selection. Circular questions and solution focused skills were driven from CMM theory. These questions were systematized as a generative technique of direct effect and buffering effect. 3. The theoretical framework of measurement is constructed by modifying "Interaction process analysis" (Bales, 1950), which is one of the categorizing systems most frequently used to analyze the interaction process. Furthermore, the results by "Interaction process analysis" are illustrated using a three dimensional graph. This graph is used to show the dynamically changing process of cases before and after intervention.

Two case studies are used to discuss in the effectiveness of these frameworks as a clinical theory. We attempted the redefinition of the social support effect based on a generative idea because the traditional one was too static to apply to the clinical theory. The processes involving increasing the redefined social support effect were discussed by contrasting cases. Through the intervention process, the effectiveness of intervention skills to increase the social support effect was also examined. One intervention to increase the social support effect was by changing the rules in the transaction process of the social support network through the approach to the client. This intervention triggered a fluctuation of the subsystems and changed the total ecological system. Another for increasing the social support effect was by utilizing the skills of a member of the social support groups. This intervention showed that the subsystems were transformed from a change to the total ecological system. By means of intervention skills based on CMM, solution rules in the social support network were exposed and reinforced. Afterwards, the process of increasing the social support effect interacted with the process of gradually reducing clients' stress reactions. The elements of these processes of change were sorted by Bales' categories and presented using a three dimensional graph.

As a result, three aspects of the effectiveness of the generative theory of a social support network were shown through these case analyses; the basic clinical theory based on ecological system, clinical intervention skills drawn from CMM, and the measurement method.

To refine the generative theory of a social support network in the area of health welfare, three types of study are required. First, a continuation of this clinical research to refine and generalize the systematized basic theory. Second, to elucidate the most effective use of skills that will increase the social support effect based on CMM. Third, to verify the reliability and validity of measurements.

審査結果

大下氏は、臨床心理士、社会福祉士、精神保健福祉士の資格を持ち、病院でカウンセリング臨床に関与しつつ、県立広島大学保健福祉学部において福祉臨床教育に携わってきた。この経験を研究成果として公表する活動を展開し、すでに単著の専門書を含め、書籍を何冊も出版し、国内外の学

会でも発表を続けている。今回の博士論文はこれまでの発表作品を含む総括的な業績となっている。

氏の研究は、クライアント及びその周囲にいるサポーターたちが陥っている不幸の悪循環場面に介入する臨床経験を踏まえて、理論構築と介入過程の測定技法開発を試みた野心的なものである。

氏は、ソーシャル・サポート・ネットワーク理論の再構築にむけて、個人を単位とするのではなく、対人的トランズアクション場面における現実構成の規則群（意味構成規則と行為選択規則）を単位として把握する理論構築を行っている。この理論体系はCronen,V. E 等北米コミュニケーション学派の Co-ordinated Management of Meaning 理論の系譜に位置づけられる。氏のその体系に対して、ソーシャル・サポート・ネットワークの中で生成されるストレッサーとサポート効果及びバッファー効果を説明する理論的枠組みを整理し、これまでの実在的なソーシャル・サポート・ネットワーク論の限界を乗り越える研究の新地平を切り開いたものと評価できる。

さらに氏は、この理論的整理に基づいて、ソーシャル・サポート・ネットワークの臨床場面でクライアントやサポーターの陥る悪循環の様相を測定する技法の開発をめざしている。ここでは、ベールズの相互作用カテゴリーを援用しながら、三次元座標の中に写し取る技法を開発することに成功している。介入前と介入後でどのような変容が生成されたかをデータとして可視化することができたので、その有効性を例示するために、臨床的介入事例に則して、ソーシャル・サポート・ネットワークの生成的変容を紹介している。これは、実際の臨床場面での応用可能性を提起したものとして高く評価できる。

とかく健康福祉の基礎研究においては、ハイ・リスク・アプローチに傾斜する臨床的研究と、ポピュレーション・アプローチに傾斜する疫学的統計研究に二極分解する傾向があるが、大下氏の研究は前者の系譜に立ちながらもポピュレーション・アプローチに対して一定の示唆を与えることのできる理論と技法を提示したものとして、健康福祉学の上からも高く評価できる。

創発特性に対するダイアド・モデルを基礎とした理論からの説明可能性と限界性の検討、開発した技法の汎用化を図るための改善、事例を集めて介入の信頼性と妥当性を検証する作業などが今後の課題として残されているが、氏は独立した研究者として十分に探求し続ける能力・識見を備えているので、持続的研究で期待に応えられると判断できる。

以上を鑑み、審査委員会の小川全夫、樫原朗、高野和良、加茂陽は、大下由美氏の博士論文を合格と判定する。

以上